

## 第 109 回奈良県河川整備委員会 議事概要

日時：令和 7 年 3 月 25 日（火）10 時 00 分～11 時 30 分

場所：リガーレ春日野 吉野の間

出席者：

【委員】川池委員（委員長）、岡崎委員、久保田委員、倉橋委員、河本委員、佐山委員、庄田委員、館野委員、福井委員、堀野委員

【事務局】奈良県県土マネジメント部 河川整備課

議事：

- (1) 第 108 回奈良県河川整備委員会の議事概要について
- (2) 委員のご意見への回答について
- (3) 進捗点検とりまとめ【大和川水系（布留飛鳥圏域）】について
  - ・（環境モニタリング調査計画を含む）

- (1) 第 108 回奈良県河川整備委員会の議事概要及びご意見への回答について

[ご意見への回答について]

○河本委員 資料 1-2 で「修正後」の資料では無名橋の撤去に伴ってどこが通れる道になるのか（迂回路になるのか）わからない。

→平面的なルートが分かるように修正する。

- (2) 進捗点検とりまとめと環境調査結果について

○館野委員 資料 3-1 の 17 ページの「前回調査との比較」に関して、「著しい悪化はみられない」という文言では、ややマイナスの評価をしている印象を受けるが、そうした理解でよいのか。

→「悪化」から「変化」という文言に修正する。

○久保田委員 資料 2-2 の 2 ページに載っている「河川整備計画の対象河川位置図及び整備状況」では布留川等の分水位置が反映されているが、他のページでは訂正されていない箇所があるため修正すべき。

→分水を他の平面位置図にも反映する。

○岡崎委員 布留川について、写真だと川幅が変わっているように見える。河川を広げたということの理解でいいのか。

→その通りである。代表断面に関しては、布留川南流では河床部が 4.7m から整備後 9.7m、と倍以上に広がっている。川幅も 5.6m だったのが 11.8m になっている。

○岡崎委員 植生からみれば土手と河底の植生は違うので本来であれば分けて評価した方がよいと思う。奈良県の場合ゆっくり工事を進めているメリットがあって、上下流から少しずつ修復してくれていて、その結果今のデータが出てきている。今回大きな変化がないということで安心している。あと、対照区間のデータが載っていないが今回はしていないのか。

→調査は実施しているが、対照区間の事前調査を実施できていないため、工事前後の対照区間での比較はできない。

○岡崎委員 河川全体の上流域で、改修を行わない区間における変化を見することで、改修区間も含めた環境の変化が理解できると考える。次回からは、改修区間以外の変化を追う視点も導入し、工事の影響を見ていただけたらと思う。

→来年度の調査結果では工事前後および、工事をしていない箇所の前後比較、どちらもお示しできるかと思う。

○堀野委員 (資料 3-3 で) 来年度の対象区間はオレンジの箇所だけなのか。葛下川①(王寺町)、葛下川②(香芝市)が外れる理由がわからない。

→オレンジ色の箇所が来年度の対象箇所である。選定から外した理由は、既往調査区間の整備進捗がないため。工事後のデータが取れるところを優先して選定している。

○堀野委員 高田川①(広陵町)は既往調査区間の整備進捗があり、対象調査が行えるから選定したのか。

→その通りである。来年度調査する時点で、対照調査区間かつ進捗のある区間を優先した。

○堀野委員 今後 5 年間で進捗予定がある箇所も選定するべきではないか。今後 5 年間の進捗予定の○×はどのような意味があるのか。

→調査時点で、進捗が見込める箇所がなければ今後 5 年間の進捗があるところを優先する。来年度においては、対象調査区間で進捗が見込めるため、今後 5 年間の進捗予定は選定理由の優先度が低くなっている。そのため、今後 5 年間で進捗予定も選定の際には意味を成している。

○堀野委員 データを経時的に追うことが望ましい。令和 2 年と平成 27 年も調査した箇所を外すのは不適切だと考える。現在の選定案から 1 箇所除いて、葛下川①(王寺町)、葛下川②(香芝市)を優先したほうがいいと個人的には思う。また、資料の表現でわかりづらいところがある。例えば資料 3-1「指標種の選定の考え方」で水際環境の存在は全く意味をなさない。水際環境はどこにでも確保されているはずなので、水際の流況、あるいは堆砂の状況などにすべき。

→どのような表現が適切であるか、再度検討する。

○堀野委員 資料 3-1 の 17 ページ米川の「経年的に分布が拡大している様子が窺える」とあるなら、経年変化の写真があるべき。本資料では工事前後の比較のみであり、経年的な変化を追うことはできない。

→写真の選定や文言を修正する。

○堀野委員 資料 2-2 の 8 ページ、浸水深図には破堤地点が図示されているが、凡例では「破堤地点：なし」となっている。これはどういう意味か。

→築堤であれば破堤するというシミュレーションにするが、掘り込み河道ならそもそも破堤しないので溢水のみになる。この×は破堤地点ではない(溢水のみ)という意味で示しているのか、記載ミスなのかは確認して修正を行う。

○久保田委員 資料 3-1、15 ページでは布留川南流の写真から、川幅が広がったことが確認できるが、生物多様性へ配慮した工事を行ったのか。あえて土砂を残す工法を行ったのか。

→資料の 2-2 の 17 ページに代表横断面図を示している。工事時は濡筋をつけて工事をするということは現状ではしていない。上流は改修前で川幅が狭いので流速が速くなり、土砂がたまりにくい、下流は改修して川幅が広がっているため土砂がたまりやすくなってこのような濡筋が形成されやすいような状況だと考えている。質問のように河川改修時に濡筋をつけて施工することは現状ではできていない

が、一部の河川では滞筋をつけたような土砂取りを試行的に実施することを検討している。

○佐山委員 河川環境に配慮した整備というのは、河道の形状を工夫したり、植生が繁茂しやすい護岸の整備をしたりすることと認識している。整備をして、そのあと何年ぐらい経過していて、その結果として本当にそこに植生が繁茂したか等の結果がわかる資料になっていると良い。今の資料は、意図してやったものと意図せずにやったものの結果が混在しているように思う。

○岡崎委員 同じような意見だが、今の人がいなくなった後でもわかるように、工事の歴史性や過程を報告書に残しておいて欲しい。例えば、石を残すと多様性に良いとか、工事の中で瀬と淵を残したり土砂を一部残したりすると大きな変化が無かった等と記録しておけば、他でもやってみようかという指針にもなると思う。

→今後の資料作りの参考にさせていただく。

○河本委員 資料 3-1 の 17 ページ米川の河川景観の写真が前回と今回で、撮影された場所が違う。「コンクリート護岸の前面に巨石が配され」とあるが巨石が写真から読み取れない。資料 2-2 の 37 ページの右下の写真の石のことなのか、見る人がわかりやすいようにしてほしい。38 ページも「寄石」と「擬石ブロック」という言葉があるが、資料 3-1 の 17 ページは巨石もまっている、表現を統一してほしい。

→言葉を統一したうえでどこの部分を指しているかわかる資料にしていきたい。

○川池委員 資料 3-1 の 17 ページの写真で、砂州ができて植生が繁茂して生物多様性が確保されて良かったということだとおもうが、治水の観点からみると植生が育ちすぎて、砂州が固定化されてさらに土砂が堆積し続けるような状態になってしまうとよくないことになっていく。これが想定されている状態での環境なのかどうかを引き続き見ておいて欲しい。また、その前の対照調査区間との比較は調査結果を示すだけで終わっている。一行でもコメントを残し、県としてどのような意図で比較・考察したのか、わかるようにしていただきたい。

→今後の資料作りの参考にさせていただく。